



携拳深掘りシリーズ#3

そもそも携拳って何なのか？

東住吉キリスト集会 高原 剛一郎 氏

^o.^o.*^o.*^o.*^o.*^o.*^o.*^o.*^o.*^o.*^o.*^o.*^o.*^o.*^o.*^o.*

お元気ですか。高原剛一郎です。今日は携拳を考えるシリーズの第3回目です。辞書で“けいきよ”と引くと、軽い“軽”と、選挙の“拳”の“軽拳”しか出て来ないんですね。皆さんのスマホやパソコンでも“けいきよ”と打つと、まずこれが出て来ると言うんです。その意味は“物事を深く考えず、軽はずみな行動をすること”なんですね。実にいかなあというようなことですよ。

でも、聖書が語っている終末論の**携拳**は、もちろんその意味ではありません。携えるという文字/携帯電話の“携”と、挙げるという文字/選挙の“拳”で**携拳**なんですね。その意味は、艱難時代の前に、キリストがすべてのクリスチャンたちをー 生きているクリスチャンも死んだクリスチャンもすべてー 復活させて、死を経験しないまま引き上げさせ、天国に連れて行くということです。この携拳のそもそもの由来となった言葉を、今日は調べたいと思います。

テサロニケ人への手紙第一 4章

16 すなわち、号令と御使いのかしらの声と神のラツパの響きとともに、主ご自身（イエス・キリスト）が天から下って来られます。

17 そしてまず、キリストにある死者がよみがえり、それから、生き残っている私たちが、彼らと一緒に雲に包まれて引き上げられ、空中で主と会うのです。

彼らと一緒に雲に包まれて引き上げられる。

引き上げられるという言葉はギリシア語で“ハルパゾー”。

新約聖書はギリシア語で書かれているので、ここはハルパゾー。

これがラテン語になるとラプター。ラプターが英語になるとラブチャー。

ラブチャーが日本語に翻訳されて携拳なんです。

私は引き上げるという言葉携拳と翻訳したのは、非常に優れた翻訳だと考えています。携帯電話の“携”は手に取って移動する、“拳”は下のものを上に移動させることなんです。つまり、キリストが教会をこの世という下の世界から上の世界に、手を取って引き上げるということなんですね。これが携拳であり、そして、初代のクリスチャンたちにとって、まさに望みの中の望みだったわけです。

では、携拳の時にはどんなことがあるのか。死んだクリスチャンは復活し、携拳の瞬間に生きているクリスチャンたちは、死を経験しないで天に上げられる。

“上げられる”というイメージをもう少し豊かにするために、このハルパゾーという言葉が他の個所でどのように翻訳されているか見たいと思います。

マタイの福音書 13章 19節

だれでも御国のことばを聞いて悟らないと、悪い者が来て、その人の心に蒔かれたものを奪います。

奪いますがハルパゾーです。奪うとは無理に取り上げて自分のものにする事。この世にいたすべてのクリスチャンを、無理にでも、強引な力を発揮してでも、ご自分のものとするためにキリストが引っ張り上げる。これがハルパゾーなんですね。

ユダの手紙 1章 23 節

ほかの人たちは、火の中からつかみ出して救いなさい。

つかみ出すがハルパゾーです。つかみ出すは文字通り、手で掴んで外に取り出すことです。キリストはこの世にいるクリスチャンたちの手を取って引き出し、引っ張り上げ、空中で再会を果たし、天に上げてくださる。これが携拳なんですね。

ところで、なぜキリストは、地上にいるクリスチャンたちを無理にでも引っ張り出すのでしょうか。私は大きく言って、2つの意味があると思うんですね。

①この世界はクリスチャンに相応しいところではないから

クリスチャンたちが信頼し、崇拝しているイエス・キリスト。このキリストを十字架に掛けて殺してしまうという価値観で出来上がっているのがこの世界です。キリストにとことん従う人は、この世では大きな問題を受けることになるでしょう。今でも共産圏や支配的警察国家では、キリストを信じることで、迫害や弾圧を受けることがあるんですね。

②艱難時代に遭わせないため

携拳は艱難時代の前に起こります。艱難時代に突入させないために、その前にキリストが迎えに来てくださるんですね。その根拠も、このシリーズでお話したいと思います。

いずれにしても、携拳は初代教会の人たちの望みでした。

次回は、いったいだれが携拳に与るのか。そして、携拳の時に引き上げていただくために、私たちはどうしたらいいのかについてお話ししたいと思います。

チャンネル登録もよろしくお願ひします。ではまた、ごうちゃんねるでお会いしましょう。皆さん、お元気でいらしてください。さよなら。

引用文献；新日本聖書刊行会『聖書 新改訳 2017』いのちのことば社,2017